

ビバハウス便り NO.87 一人の死者も出さなかった被災地の町・岩手県洋野町  
ビバハウス 責任者 安達 俊子

先号NO.86に書いた9月末札幌で開かれたワーカーズコープ「北海道集会」に引き続き、10月末は、「東北集会」（岩手県）、11月末には「全国集会」（埼玉県）に参加してきた。岩手に行ったのは、東北の被災地の現状をこの目でしっかりと見ておきたかった事、併せて以前より、「機会があれば是非わが町に来て、講演をしてほしい」との強い依頼を岩手県最北限の洋野（ひろの）町の水上信宏町長から頂いていたからだ。

水上町長さんは、実は、私たちに町内入舟町シガスーパー真向かいの国道に面した2階建ての建物（今でも『若者自立塾ビバ』と看板を掲げている）を譲渡して下さった石田照夫・イチご夫妻の奥様の実弟に当たる方で、これまでに何度も石田さん宅でお会いし、お電話でのお話も重ねてきた。おひとりになったお姉さんの事を気遣い、何度も余市を訪れる町長の心のやさしさに感動していた私たちは、いつか機会があれば、洋野町の町政の様子も実際に見たいと願っていた。

今回の訪問に当たり、調べてみると岩手県内で、一人の死者も行方不明者も出さなかった唯一の町であることが分かった。「東北集会」の分科会で、『被災地ツアー』に参加し、同じ岩手県の大船渡市、陸前高田市で目を覆うような惨状と、信じられないような多数の死傷者の数（岩手県全県の死者は4,671名、行方不明者は1,237名）を知らされて、言葉を失った私たちにとって、俄かには信じ難いことであった。

10月28日夕、わざわざ八戸駅まで出迎え下った町長さんに、「どうしてこの町だけには被害者が出なかったのですか？よほど町長さんを初めとした役場の皆さんと町民の皆さんの連携が日頃からしっかり取れているからですか？」と矢継ぎ早の質問をした。これに対し町長は、「消防団を中心にした地域コミュニティごとの自主防災組織が大きな働きをしてくれました。」と穏やかに応えてくれた。自らの手柄として奢る事なく、町民の健闘を称える姿に心底からの感銘を受けた。

幸いに人的被害はまぬかれたが、家屋倒壊26戸を初め、漁港、水産加工場、基幹産業のウニの養殖施設などを含む被害総額は、実に50億を超えるという。町長が被災直後真っ先にやったことは、何はともあれ津波による瓦礫を町費で取り片付けることだったという。突然仕事を失った町内業者に仕事をしてもらい、県や国からの補助を受けられるかどうかはまだ分からない段階であったが、町中をきれいに片付け、町民にこの災害に打ち勝つ気構えを伝えたかったという。今後の課題として、単なる災害の復旧ではなく、新たな復興、新しい未来に向けた町づくりを目指したいとの事であった。

29日、町民文化会館での講演では、会場いっぱいの皆さんが、食い入るような真剣さで最後まで熱心に聞いて頂いた。あらゆる困難に抗して、『未来の同労者』である大切な生徒のために、教師集団が常に全力で、学校づくりに挑んだ『北星余市の教育実践』と、その精神を踏まえて、さらに新たな挑戦の日々を続ける『ビバハウスの実践』が、試練の日々を過ごされている皆さんにささやかな勇気を与えるものであってほしいと願っている。